

本書はあらためて教えてくれている。

各国の事情について、医師であり、医史学研究者としての視点から、各種の情報をきめ細かく、しかも自らの体験に基づきながらも冷静な客観的な視点から記述してあるのは大変参考になる。貴重な資料である。

まさに生きたアジア医科学史の散歩であるとともに文化史散歩でもあるところがユニークなところと言えるように思う。

アジア地域はその政治と同じように、文化事情も刻々と変化しつつある。その変化に応じて追加・補訂を要するのであろうし、読者自らが加筆すべきであろう。

ダイナミックに医学史研究の世界に生きている著者の行実が生々しく伝わる一書である。

(蒲原 宏)

〔考古堂書店 新潟市古町通四一五六三、電話〇二五—二二九—四〇五〇、平成十一年十二月一日、A5判、一二二頁、本体価格二、八〇〇円〕

中山 茂春 著

『筑後久留米藩医中山家系図』

著者の中山茂春氏は福岡市内で父君の後を継ぎ内科医として診療する一方、若くして医史学を志し、この方面で活発に

研究している学徒である。

この度、新たに『筑後久留米藩医中山家系図』を出版されたが、これを繙けば、著者は壮大な樹木にも例えられる見事な医家家系の中にいて、歴史にのめり込むのは当然の成りゆきであることが理解できる。

この本には著者の出自である、中山家を中心として、それから派生し関連ある多数の家系が紹介されている。

そもそも中山家の淵源を辿れば、筑後地頭の宗家に求めることができる(対馬藩主宗家の縁戚も可能性があるという)。

中山家の久留米有馬藩医としての初代は道可(一七六九、明和六年没)まで遡れる。道可は筑後御原郡福童村(現福岡県小郡市)で開業していたが、有馬藩七代藩主頼隆に召し出されたのが藩医としての始まりである。

以後、代々医家として続くが、その中でも五代中山元琳(二代目元琳、一八三七—一九〇五)は、日田の広瀬淡窓とウイリスに学び、藩の医学学校好生館で教鞭をとり、維新後も久留米で医学界をリードする俊英であった。このことは著者によって福岡県医報、一九九七年七月号で詳細に報告されている。

弟泰純は同じ久留米藩尾家の養子となり、ここからも歴代医師を輩出している。

第四代琳庵の妻シマは藩医松下家の出自であるが、この甥に松下元芳(二代元芳、一八三一—一八六九)がいる。彼は緒方適塾の塾頭を務めた秀才で、同じ九州出身で塾頭であった、福沢諭吉、長与専斎と同期であった。久留米藩の西洋医学は

彼を中心として広がり、藩医学校「好生館」に繋がるのである。彼についても著者は、本誌第四十四巻第三号(平成十年)に詳述している。

著者茂春氏は、初代道可の三男清左衛門(儒学者、直系であるが、この血統からも「相学提要」の著者中山(岩村)圓平、新政府側の医師として、戊辰戦争に参加した元朴(著者の曾祖父)の弟がいる。

時代は下って著者の祖父中山石庭(一八七〇—一九四五)の妻ツテの実家は蒲池家で、この家系からも現在に至るまで多くの医家を生んでいる。石庭の長男は弘道で、九大医学部出身で、福岡市で盛業の医師であった。なお弘道の長男和道は久留米大学第二外科の教授であった。

石庭の次女路は九大第一外科助教授であった鳥巢太郎に嫁している。鳥巢家からも要道(福岡県中間市立病院院長、岳彦(大分医大教授)が出ている。

この中山家とは別に、著者の母堂の実家豊前中津藩の晴野家、さらに祖先で繋がる小笠原家、前述の蒲池家、著者夫人の実家鶴田家、母方の曾祖母の実家平野家と、尽きることのない名家、名医の大樹の枝が繁茂している姿が続く。

筑後には江戸時代種痘をこの地方で実施した緒方春朔や、幕末の幕府奥医師として名を馳せた高松凌雲など英明な医家が見られる。

しかし、それにもまして中山家の繁栄振りには、筆舌に尽くし難い圧倒的な叡智と力を感じる。日本全国には医家の名

門は数々あるが、未広がり代を追うごとに大きくなる家系は稀である。そういう意味でも、名門医家の研究には欠かせない著書と言える。

本書の途中には、息抜きに著者が書いた、中山家にまつわる医学史の小論文が挿入されていて、それぞれが価値ある読み物となっている。

なお、中には久留米市文化財となっている「相学提要」が、現代語訳とともに掲載されている。好事家にとって便利であろう。

(小林 晶)

〔唐津第一病院・唐津市朝日町一〇七一—四、電話〇九五五—七二—二三九〇、平成十一年十一月三十日、B6判、二七六頁、非売品〕

二宮 陸雄 著

### 『医学史探訪 医学を変えた一〇〇人』

著者は一九五四年生れの東京の開業医であるが、活発に医学史関係の著作を発表されている。この本は『日経メディカル』の一九八八年以来の連載をまとめたもので、古代から現代に至る欧米・アジア・日本の一〇〇名の医学者・医師を、その業績を中心に紹介しているが、とくに欧米の医学者が多い。原則として、一話題に二頁を充て、三〜四枚の写真が添えられている。